陸前高田市文化遺産調査におけるESD教材開発（5）

－まちづくりを題材にしたESD－

後藤田洋介
（奈良教育大学大学院　教科教育専攻　理科教育専修）
中澤静男
（奈良教育大学　次世代教員養成センター（ESD・課題探究教育部門））

The fifth Teaching material creation for Education for Sustainable Development at researching cultural heritage in Rikuzentakata city
－Education for Sustainable Development Based on *Machidukuri*－

Yosuke GOTODA
（Graduate School of Education, Nara University of Education）
Shizuo NAKAZAWA
（Teacher Education Center for the Future Generation, Nara University of Education）

要旨：陸前高田市文化遺産調査を実施して４年目となる。陸前高田市では、高さ 120 メートルほどの山を 40 メートルになるまで切り崩すことで高台に住宅地を造るとともに、排出される土砂を旧市街地のかさ上げに使うという、ハード面での復興が目を引く。しかし、いまだに多くの被災者が仮設住宅に暮らしておられ、生活再建のめどの立っていない高齢者も多い。そのような中、自らのまちをよくしていこうという活動をしている市民がいることを調査の中で知ることができた。その人たちの話を聞くことによって、自らのまちがどのように作られているのかに興味を持ち、自らそのまちづくりを担う人となるような教材を開発した。

キーワード：持続可能な開発のための教育　Education for Sustainable Development
東日本大震災　Great East Japan Earthquake
まちづくり　Machidukuri

１．はじめに

奈良教育大学では、地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクトの一環として、陸前高田市を中心とした文化遺産調査に取り組んで４年目となる。今年度は、「ESD を核とした教員養成における高度化―教員養成・研修における ESD モデルプログラムの開発と普及」の一環として、本学教員４名、大学院教育学研究科修士課程１名、専門職学位課程１名、学部生２名からなる調査チームで、2015 年９月８日から 11 日にかけて、文化遺産調査とそれをもとにしたＥＳＤ教材開発、及びＥＳＤ・防災教育の研究開発に取り組んだ。

今回の調査の主な日程は、一日目に大木囲貝塚・七ヶ浜歴史資料館見学、湊浜薬師堂での３Ｄスキャナーによる文化遺産調査。２日目に陸前高田市教育委員会での、協定関連の話し合い、陸前高田市博物館（元生出小学校）への表敬訪問、コミュニティカフェでのインタビュー、元気仙小学校校長菅野さんによる勉強会、唐桑半島ビジターセンター見学。３日目は文化遺産調査班と防災教育班に分かれた。文化遺産調査班は常膳寺の不動明王の３Ｄスキャン、泉増寺での秘仏の調査を行った。防災教育班は、広田半島の見学、細根沢仮設住宅でのインタビュー、タピック 45、復興まちづくり情報館、気仙大工左官伝承館を見学した。４日目には一関市博物館、仙台市博物館を見学という、非常に内容の多い調査であった。本稿ではコミュニティカフェや、細根沢仮設住宅での聞き取り調査で学んだことを中心に陸前高田市のまちづくりに着目し、地域の人のまちづくりとＥＳＤについて考察を行う。

昨年度の報告書では、アメリカのノンフィクション作品である『災害ユートピア』（レベッカ・ソルニット著）を参考に、災害後の危機管理について考察を行っていた。災害後に起きるユートピア現象を児童生徒に追体験させることによって、「「人と人がつながりたい、何かに参加したい、人の役に立ち、目的のために邁進したい」という自己の欲求を発見することが、日常的な持続可能な社会の実現への活動意欲になる」[(1)] ものとして教材を作成した（中澤・竹田・島　2014）。今回の調査では、コミュニティカフェでの取材で、「災害後に何かできないかと考

えた時、人が集える場所を作りたかった」とおっしゃっていた、コミュニティカフェのオーナーの話や、仮設住宅での聞き取り調査で、「コミュニティが破壊されないまま、仮設住宅に移り住んでいるおかげで、今でもコミュニティが続いている」というような話を聞くことができた。このことを発展させ、まちづくりを題材にしたＥＳＤ教材を開発したいと考えた。

まちづくりは、田村（1999）によると、よい「まち」を作っていくことである。ここでのよい「まち」とは、「住んでいるすべての人々にとって、生活が安全に守られ、日常生活に支障なく、気持ちよく豊かに暮らせ、緊急時にも対応できる「まち」だ。住んでよかったという実感を心から感じ、次の時代にも継続が期待できるものである。」[2] としている。換言すると、まちづくりとは、持続可能な「まち」を、作っていくことであると考えられる。陸前高田市では、東日本大震災とその津波によって、ほとんどの住宅が破壊され、甚大なる被害を受けた。この調査中に、「やっと０地点に戻ることができた、これからまちを作っていくことがはじまる」という山田教育長の話があったように、陸前高田市のまちづくりは始まったばかりだといえる。このことを題材に、授業を構成することで、自らのまちのまちづくりを振り返るきっかけを持ち、持続可能なまちづくりの主体になるのではないかと考えている。

２．まちづくりとＥＳＤについて

前述の田村は、「住民全体が共同体の一員として生活していることを自覚し、地域への責任をもって参加し協働できる積極的な意識を持つ「市民」へと育つのは、「まちづくり」の基盤である。「まちづくり」は「ヒトづくり」ともいえる。」[3] と述べている。まちづくりはまちそのものを作るだけではなく、まちづくりに積極的にかかわることができる市民を育てることもまちづくりの一環であると考えられる。

日本ユネスコ国内委員会（2012）では、ＥＳＤで目指すこととして、持続可能な発展に関する価値観を育んでいくことが大切であるとしている。その持続可能な発展に関する価値観の例として人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重などを挙げている[4]。これらの価値観とまちづくりがどのように関連するのか、前述の田村はまちづくりの仕事として住むに値するまちづくりが必要だとし、その内容が広範にわたるとも述べ、いくつか例を挙げている[5]。田村のまちづくりの仕事を持続可能な発展に関する価値観によって整理したものが図１である。

分類によって、まちづくりの仕事には、環境（まちづくりのハード）的部分と人間の尊重（まちづくりのソフト）的部分が多いことが分かる。また、このようにまちづくりを考えるなかで、まちづくりが持続可能な発展に関する価値観と共通する部分が多いことに気付くことができる。

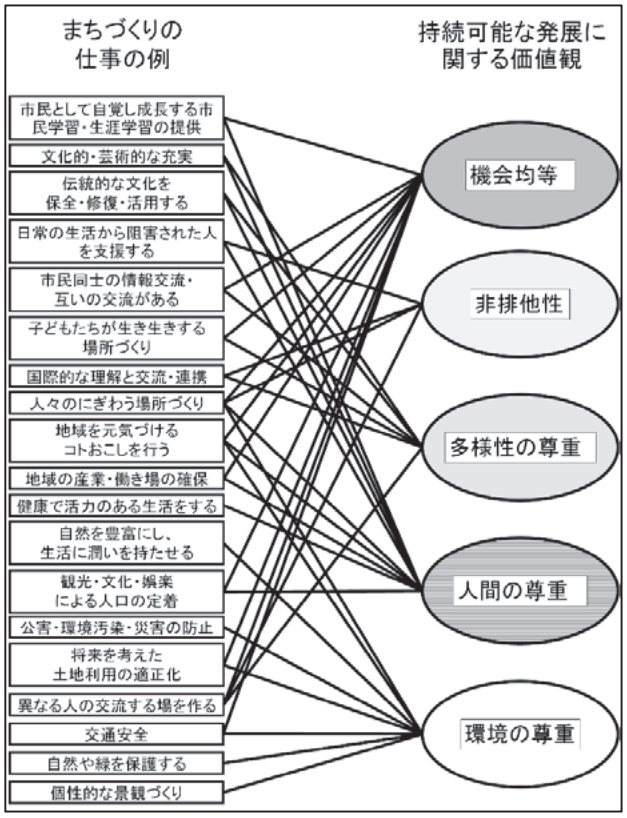

図１　持続可能な発展のための価値観とまちづくりの仕事の整理　（日本ユネスコ国内委員会（2012）と田村（1999）をもとに筆者作成）

まちづくりと教育に関して、寺本（2001）は「子どもたちが「自分がこの町に住んでいるんだな」「自分もこの町の一人なんだ」「何とかして自分もこの問題を解決・改善していくことにひと役買いたいな」と「主体化していくプロセスに、多様な能力の育成を望みたいし、同時に大人たちもともにかかわっていくことで、次世代に託したい「町づくり」への願いを自覚していける。」[6] としている。まちづくりを題材に教育活動を行うことによって、持続可能な発展に関する価値観を養うことができ、持続可能な社会に参画していく意思を養っていけると考えられる。

３．陸前高田市の復興計画と現状

陸前高田市では、復興のシンボルとして希望の架け橋というベルトコンベアーを用いて、山から土砂を切り出し、堤防の建設及び、高台の建設を行っている。この希望の架け橋を中心としたベルトコンベアーの工事は、平成 27 年９月をもって終了した。10 月から取り外し工事を行っている。希望の架け橋に関しては、復興のシンボルとし、平成 28 年３月まで残される。このように、観光資源としても復興工事を活用している。

平成23年に策定された陸前高田市の震災復興計画によると、まちづくりの目標として６つ挙げている。それは、「「災害に強い安全なまち」「快適で魅力あるまち」「市民の暮らしが安定したまち」「活力あふれるまち」「環境にやさしいまち」「協働で築

くまち」」[7] である。この６つの目標の平成 26 年度までの達成状況は 17.9 %となっている [8]。震災後から陸前高田市では住居の建設を最優先で行っている。防災集団移転促進事業による団地の建設では、全 28 団地中 24 団地が平成 26 年度に建設済みであり、災害公営住宅整備事業で建設中の団地では全 11 団地中 4 団地が建設済みである。どちらも平成 27 年度から平成 28 年度には全団地が完成予定となっている [9]。このように、住居などの復興計画については数々行われている。

平成 27 年度陸前高田市文化遺産調査では、防災教育教材の開発として、地域住民の聞き取り調査を行った。その聞き取り調査については次章で紹介する。

４．聞き取り調査について

今回の平成 27 年度陸前高田市文化遺産調査では、陸前高田市やその周辺に関る様々な人々に聞き取り調査をすることができた。これらの調査結果を以下に示す。

・陸前高田市は今までにない大災害に見舞われた。被害の規模はほかにも大きな市があるが、住居の建設などに関わり、陸前高田市が最も復興予算がかかっている。(陸前高田市教育委員会でのインタビュー)

・この未曾有の災害を忘れないために、陸前高田市は、防災教育を学べる地にしていきたい。修学旅行や教員研修で陸前高田市を訪れて、防災教育の向上に寄与していきたい。（同上）

・被災からしばらくして、様々な情報を交換するような場が必要となってきた。その必要に応えて、近隣に住む主婦とともに、カフェを作った。(陸前高田市のコミュニティカフェ店長へのインタビュー)

・コミュニティカフェでは市街に住む人々の情報交換の場になっていった。次第に外部からも注目されるようになり、大学から支援を受けて、今の建物へと改築を行った。（同上）

・復興が進み、このカフェも必要なくなってきたと思ったが、周囲の支援もあり、現在も続けている。現在は、市街の人たちの健康を増進するような場を目指し、活動を行っている。(同上)

・仮設住宅に移り住んだ時は、今までの住居との違いに苦しんだ。隣の家ととても近く、話している声が隣に聞こえているのではないかと感じたり、子どもと４人で住んでいたので、とても狭く感じたりしていた。（細根沢仮設住宅でのインタビュー）

・この仮設住宅の集落では、気仙町と高田町の二つのまちからの移設であったので、比較的にコミュニティが破壊されずに済んだ。仮設住宅に移住後に、区報を出したり、交流イベントを行ったり、家庭菜園をみんなですることによって、コミュニティを強固にすることができた。（同上）

・被災直後に様々な交通インフラがマヒを起こしていた。看護をしていた人を病院に救急車で連れて行ったとき、帰りの手段がなくて大変に困った。（社会福祉施設の看護師へのインタビュー）

・防災教育を中心に展開をしてきたが、現在では、復興作業に関わるトラックが町中を走り回り、道路の復旧も完全ではないので、児童が通る道とトラックの通る道の間が少ししかなく、危険である。防災も重要であるが、交通安全についても見直しが必要になってきた。（気仙沼市立小学校教員へのインタビュー）

以上のような聞き取り調査をすることができた。気仙沼市の小学校教員からの聞き取りでは、児童の防災の視点を生かした授業を作りたい反面、地域が現在直面している交通安全という問題を解決する必要性が示唆された。陸前高田市教育委員会での聞き取りでは、東日本大震災という災害を忘れないために、また他の地域にもこの経験を生かしていくために、防災教育を学べるまちづくりをしようとしていることが分かる。コミュニティカフェの店長は、震災直後に自分にできることを考えた結果、様々な情報を交換する場が必要であることを感じ、自らまちづくりに参加している。仮設住宅の住民への聞き取りでは、仮設住宅でのコミュニティづくりに一役買うために、どのようなことができるのか思案し、イベントづくりや区報を作るなどの活動をしていることが分かった。これらの聞き取り調査の結果から、陸前高田市の人々が、自分たちができることを考え、自らの意志でまちづくりに参加していることが伺える。

住民が自らの意志で自分たちの住むまちをよくしていこうという活動を児童が知ることによって、自らのまちに興味を持ち、自らのまちをよくしていこうという意志につなげるような教材を作成した。

５．学習活動の概要

陸前高田市における聞き取り調査によって、陸前高田市の人々が自らの意志で自らのまちをよくしていこうという活動をしていることが分かった。この陸前高田市の人々の活動を知ることを契機として、児童に、自らのまちをどのようにしていくのかを考えさせる。自分のまちを知ることを目的として、自分のまちの住人にインタビューすることで、自分のまちの課題を把握することができる。そして、陸前高田市の人々がしていたように、自分にできる活動は何かを考え、発信する。この発信したことを児童が実践していくことによって、ＥＳＤが求めている行動化を促すことができるだろう。この授業の最終目標としては、自分のまちを知り、自分たちが町に貢献できることを考え行動することであり、そのことで地域に対する愛着が芽生え、持続可能な地域社会の実現につながると考えられる。以上の授業の展開を記した図が、図２である。また、授業の評価、展開はそれぞれ表１と表２のように設定した。

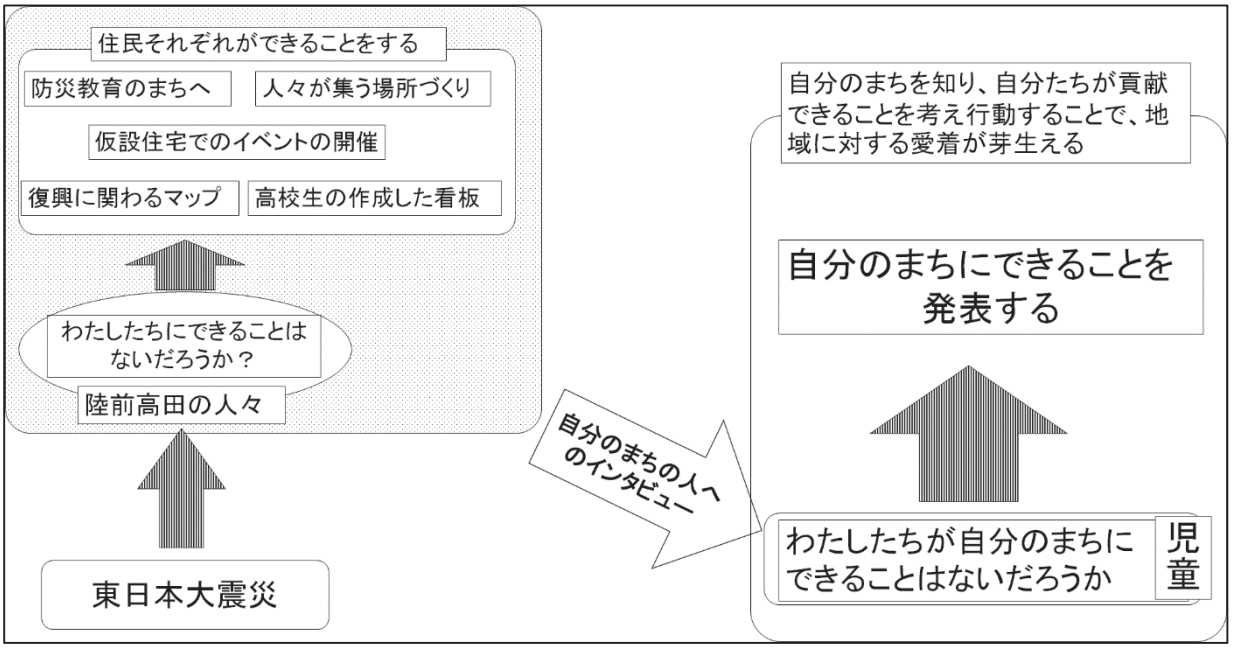

図２　授業の展開図

表１　評価規準

思考・判断・表現	技能	知識・理解	関心・意欲・態度
・自分のまちをどのように作っていくのかについて考え、未来に住みたいまちを判断し、表現している。	・地域住民に目的的にインタビューをすることができる。 ・自分の考えをわかりやすく発信することができる。	・陸前高田市のまちづくりと自分のまちのまちづくりを比較し、様々なまちづくりの方向性について理解している。	・陸前高田市のまちづくりから自分のまちのまちづくりに関心を持ち、自らまちづくりを考えることができる。

表２　学習展開の概要（全11時間）

学習内容（時間）	学習への支援	評価
１．東日本大震災と陸前高田のまちづくりについて知る。（1）	・当時の映像や写真教材を見せ、被害の甚大さを伝える。 ・インタビューをまとめておく。	◇陸前高田市のまちづくりから自分のまちのまちづくりに関心を持ち、自らまちづくりを考えることができる。（関・意・態）
２．市民の声から陸前高田の人々がどのような思いでまちづくりをしているのか考える。（1）	・インタビューをもとに考えさせる。	◇陸前高田市のまちづくりと自分のまちのまちづくりを比較し、様々なまちづくりの方向性について理解している。（知・理）
自分たちのまちのまちづくりはどうなっているのだろうか。		
３．自分たちのまちづくりに関するインタビューに出かける。（4）	・地域の方に協力をしてもらう。	◇地域住民に目的的にインタビューをすることができる。（技）
４．自分たちがまちにできることはなにか考える。（3）	・児童ができる活動を考えさせ、それをもとにまちに貢献できることを考えさせる。	◇自分のまちをどのように作っていくのかについて考え、未来に住みたいまちを判断し、表現している。（思・判・表）
５．自分たちが考えたまちづくりを発信する。（2）	・まちづくり集会を開き、地域住民と保護者に発信する機会を設ける。	◇自分の考えをわかりやすく発信することができる。（技）

６．まとめ

平成 27 年度陸前高田市文化遺産調査の中で、防災教育教材の開発として、まちづくりをテーマとしたＥＳＤ教材を開発した。まちづくりと防災というのは一見言葉は違うように思えるが、まちづくりの仕事の中に持続可能な発展に関する価値観の視点も含まれていることから、自分たちのまちに興味を持ち、自ら変えていこうとすることは持続可能な地域社会の実現、防災・減災のまちづくりにもつながると考えられる。東日本大震災で多大なる被害を受けた陸前高田市では、市民が自らまちづくりに関わっていることを知ることができたが、自らまちづくりに主体的にかかわっている人たちの話を聞くことによって、持続可能な社会を担う人を育てていくことができるのではないかと考える。

引用参考文献

（１）中澤静男・島俊彦・竹田隼也（2015）、「陸前高田市文化遺産調査におけるＥＳＤ教材開発（４）―防災教育を通した ESD」、奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要、第１号、pp. 279-283.
（２）田村明（1999）、まちづくりの実践、岩波書店、p. 28.
（３）同上、p. 35.
（４）文部科学省国際統括官付（日本ユネスコ国内委員会事務局）（2012）、「ユネスコスクールと持続発展教育（ＥＳＤ）」、p.2
（５）前掲、田村、pp. 38-39.
（６）寺本潔（2001）、総合的な学習で町づくり、明治図書、p. 22.
（７）陸前高田市役所（2011）、復興計画、http://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/kategorie/fukkou/fukkou-keikaku/fukkou-keikaku.html、（平成 27 年 11 月 29 日）
（８）陸前高田市役所（2015）、震災復興実施計画、http://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/kategorie/fukkou/fukkou-keikaku/fukkoukeikaku/jisshi.pdf（平成 27 年 11 月 29 日）
（９）同上